

僕(わが)は胸(むね)中の思(おも)を甘(あま)く現(あらわ)すことが出来(こ)なくつて悟(さと)しさに堪(た)へない。丸野(まるの)の内心(ないしん)に算(はかり)つて居(ゐ)る熱(あつ)に觸(ふ)れる事(こと)の出来(こ)来た(きた)、此友(このとも)に對(たい)する羨望(せんぼう)、正(ただ)に無(な)二(に)の友(とも)たるべくしてその機(き)會(かい)を捉(と)へ得(え)なかつた自(みづか)己(ぢ)の遺憾(いかなん)及(およ)び此友(このとも)が故友(このとも)に對(たい)する眷々(けんけん)たる情(なさけ)の美(うつく)しさなど、只思(ただおも)ふばかりで口(くち)には言(い)へぬ。事(こと)實(じつ)、僕(わが)は丸野(まるの)の追(お)ひ後(ご)病(びょう)勢(せい)宜(よろ)しからずとのみは聞(き)いて居(ゐ)たが、

第三(だいさん)回(かい)目(め)に丸野(まるの)の墓(かぶ)を訪(と)ふたのは、晩秋(ばんしゅう)の夕月夜(ゆげ)であつた。半月(はんげつ)であつたがその光(ひかり)は限(かぎ)なく空(くう)間に充(み)ち渡(わた)つて、崖(がけ)の蔭(かげ)なる闇(くま)が殊(こと)更(さら)美しく、月(つき)其(その)物(もの)を見(み)ると、物(もの)語(ご)りをし(し)かた(た)いと思(おも)ふ程(ほど)に憂(うれ)しさ、生(いき)々(せい)しさ(さ)に充(み)ちて居(ゐ)た。花(はな)や木(き)を賣(う)る茶屋(ちや)も、鼻(び)を凍(こ)える石屋(いし)も、ま(ま)戸(と)を閉(と)めてあ

つた。黒木(くろき)の門(かど)を入(い)り、石段(いしだん)を十段(じゅうだん)ばかり上(あ)つた。友(とも)は故友(このとも)の墓(かぶ)の前(まえ)に近(ちか)づく。

「今晚(こんばん)は」と云(い)つた。その聲(こゑ)には親(お)しさとなつかしさとが溢(あふ)れて居(ゐ)た。今迄(こんど)に覺(おぼ)えぬ友情(ゆうじやう)が僕(わが)の胸(むね)に湧(わ)いて來(き)た。それは團(だん)に對(たい)してばかりでなく、地下(ちか)の丸野(まるの)に對(たい)しても起(お)つたのである。生(なま)中に觸(ふ)れ得(え)なかつた丸野(まるの)の真情(まじやう)に、僕(わが)は團(だん)の真情(まじやう)を通して觸(ふ)れ得(え)たのである。

「君(きみ)、僕(わが)は今迄(こんど)君(きみ)の丸野(まるの)に對(たい)する友情(ゆうじやう)は只君(ただきみ)のもので、僕(わが)のとほ大(おほ)に淺(せん)深(しん)があると思(おも)つて居(ゐ)た。けれど今(こん)夜(や)からこそ君(きみ)と同じ度(ど)に於(お)いて彼(かれ)を思(おも)ひ出(だ)し、且(かつ)つ慕(した)ふ事(こと)が出來(こ)る。僕(わが)は君(きみ)の真情(まじやう)を通して丸野(まるの)と親友(しんじゆう)になれた。君(きみ)の魂(たま)が僕(わが)の身(み)體(たい)に半(はん)分(ぶん)宿(やど)つたのだ……」

友(とも)も君(きみ)も止(と)め得(え)ぬ情(なさけ)の激(げき)昂(おう)に陥(お)つた。次(つぎ)の會(くわ)話(わ)を二人(ふたり)がしたの(のは)數(すう)分(ぶん)間(かん)の後(のち)である。



日向(ひなた) 三つ(みつ) 和歌山(わがやま) 保田(たも) 虎(とら) 太郎(たろう) 郎(らう)

「君(きみ)は丸野(まるの)の事(こと)を思(おも)ひ出(だ)す時(とき)は、樂(たの)しき悲(かな)哀(あ)といふものを感じ(かん)ずるの(の)だらう……」

「さうだ、思(おも)ひ出(だ)すと堪(た)まなく悲(かな)しいけれど矢(や)張(はり)思(おも)ひ出(だ)したいんだ。悲(かな)哀(あ)が醜(みにく)く酔(よ)して一種(いっしゆ)の甘(あま)い酒(さけ)になつたんだ。」

僕(わが)は口(くち)の中(なか)で「死(し)後(ご)の友(とも)」「々々(く々々)」と繰返(くりかへ)した。

その夜

水野(みづの) 仙(せん) 子(こ)

菊井(きくゐ)が病(びやう)家(か)廻(まわ)りから歸(かへ)つたのは、彼(かれ)れ此(こ)れ五(ご)時(じ)近(ちか)くであつたらう、電燈(でんとう)は疾(はや)くについて、門(かど)前(まえ)に豆(ま)腐(ふ)屋(や)の荷(に)が下(くだ)されてあつた。

尻尾(しっぽ)を振(ふ)り乍(さ)ら、靴(くつ)ぬぐ手(て)に擦(こ)りつく愛犬(あいぬ)の

頭に手をついて支關に上ると、其靴を下駄箱の上に乗せて、車夫はやがて歸つて行く。

「お歸んなさい」

勝手と、患者控所の、仕切りの障子を開けた出合頭、によつきりと背の高い太一が、ぶつきら棒な挨拶をする。紙笠の二分心の洋燈を持つて居た。二人とも其儘黙つて、菊井は自分の部屋に入る。外面から俄に入つた部屋は薄暗い。何とはなしに舌鼓をして、反り返つて胸の紐を外してゐると、太一がニツケル台の洋燈を持つて入つて来た。ホヤの膨らみに、指先大の曇りが残つて居るのを、黙つて入つて来て、黙つて机の上に置いて、黙つて出て行く。其大きな體が思々しく思はれた。それと入れ違ひに、例もそはくとした、襪掛けの妻君が入つて来る。

「只今」

と入口の疊に一才片手をついて、暖ためたぬくみをさまさぬやう、胸に抱いた着物を着せかける。

「寒かつたでせう」

と勞ひ乍ら、耳は臺所に飲つて居る。襟を揃へて、背筋を撫下して、其儘さつさと出て往つてしまふ。

四邊を片付けて、ランプを細目にして、茶の間の明るみに出て来ると、鐵瓶の湯は勢宜くたぎつて居て、むつと暖かい。

「夏のご覽な、笠履に夕焼けがしてゐる、れ先刻の地震でお天氣になるんだ」

廊下に妻君の聲がする。すると台所では消魂々しく、

「叱つ！ あれ！ 奥様大變です、玉が……玉が……」

「何だいまあ」

と其處の障子を開けた妻君の聲も音高い。

「玉がお魚……あれ！ 畜生入つちまいやがつた！」

「盗つたの？ まあ何だ！ お前其處についてた癖に……仕様がなけれ畜生此頃縁の下へ入るのを覺えやがつたから……仕様がなけれ眞ん」

「一寸との間……」

と辯解らしく云ふとするのを、

「一寸の間もありやしない！ 目の前に猫が居るのを知つてながら、油

断するのが悪いんだよ」

と當り前なことを腹だしげに云ふ。暫らくしてから、

「貴夫、今んちお湯に往つていらつしやいよ！」

と命令するやうに大聲して、猶ぶつんと小言を云つて居る。

廣げた新聞を二つに折つて、菊井は云ふがまゝに湯屋に向つた。弓なりに曲つて居る町のはづれに、半鐘高く聳えて一面の雲の紅。後れた鳥が一羽急ぐ。ふと先刻の、妻君の言ひ草を思ひ出した。「地震でお天氣になる」菊井は繰り返して苦笑した。

「……」

に張られた色硝子の汗の流れを眺めたり、陶然となつた菊井は、聞く

ともなしに調子高な女湯の話に耳を傾けて居たか、愕然として湯の中に

立つた祖母らしいのが、孫の病氣の快くなつたことを、尋ねられた女

「いよく押迫り申候其後は」

と書いて一寸筆をとめる。

「……」

儘さつさと出て往つてしまふ。

四邊を片付けて、ランプを細目にして、茶の間の明るみに出て來ると鐵瓶の湯は勢宜くたぎつて居て、むつと暖かい。

「夏やご覧な、彼様に夕焼けがしてゐるよ、れ先刻の地震でお天氣になるんだよ」

廣げた新聞を二つに折つて、菊井は云ふかまに浴室に向つた。裏りに曲つて居る町のはづれに、半鐘高く聳えて一面の雲の紅。後れた鳥が一羽急ぐ。ふと先刻の、妻君の言ひ草を思ひ出した。地震でお天氣になる。菊井は繰り返して苦笑した。

濛々と立ち騰る湯氣に包まれて、光りの鈍い洋燈を見噴めたり、欄間

に張られた色硝子の汗の流れを眺めたり、陶然となつた菊井は、聞くともなしに調子高な女湯の話に耳を傾けて居たか、愕然として湯の中に立つた。祖母らしいのが、孫の病氣の快くなつたことを、尋ねられた女に語つて居るのだ。

「さすがは違ひやつさ、お見立ては確かなもんですぞい、はあ確かなもんです」

と繰り返して云ふ。無論それは小針醫學士のことである。

「お陰で命拾ひしやした、はあ」

一人は湯槽に入つたらしい、話はそれぎり止んでしまつた。菊井は矢鱈に水で顔を洗つた。

晝間の不快な心が、簇々とまた盛り返して來る。小針醫學士の腕を稱贊へる其言葉のうちに、自分の無能を罵られたやうな氣持がするやうで、「なあに」と自信力を喚び起して見た。駢はればならぬと叫んだ先刻の心はいつかまた一方から急激に頭を擡げて居る。

夕飯時とて浴客は少なく、例の通り長湯して男湯の戸を出た菊井は星のちら／＼見え初めた空を仰いで「なあに」とまた心に言はせて歩き出した。「なあに」の次には、「今に」と云ふ語が控へて居る。

夕飯も無言で喰つた。茶も無言で飲んだ。其まゝずつと部屋に引いて其机の洋燈を持つて隣室の書齋に入る。机掛けの曲つて居るのを直して其上に巻紙をのべた。

「拜啓」と太く染めて、

「いよ／＼押迫り申候其後は」

と書いて一寸筆をとめる。

「……………弊院ことも追々土地に重きを置かれ、此頃にては小生一人にては手不足を感じ申候」

と此處まで書いた時、友達でも遊びに來て居るのだらう、物置き兼の支關脇の太一が部屋に、締まりのない笑ひ聲が太くあがつた。菊井は眉を動かして舌を鳴らした。

「……………幸ひ當院はもと銀行の跡に候へば、間敷も可なり多く、御夫人御同伴にても同居苦しからず候。また當地は他に比して物價も安く

當分のお身過ぎには持つて來いの土地と存せられ候」

「……………猶此みぎり多少經驗のある看護婦一名雇ひ入れ度、御心富りは是無く候哉……………大擴張いたす心組に御座候」

云々と一先つ筆を擱いた。

あは／＼とまた笑ひ聲が響く。さも大喧ひの、口の大きな顔を想像させるやうな聲である。

「あれは駄目だ」と口を出して言つた。

「一年あまりを東京の櫻井病院で暮したところある妻君には、今後とて子の出來る見込はない。小學を卒業した時、番頭にでも遣つてしまふと田舎の養父が言つたのを、俺が醫者に仕立て、遣ると連れて來て、菊井は

太一を中學に通はせた。けれども太一は三年になる時に落第した。恰度書生の若山が逃げて居なかつた時なので其まゝ藥局に使つて居た。其當

懸賞小説の評 田山生

座こそ今にくとまた學校に出す積りで居たが、續いて来た山田と云ふのも、三月ばかりで逃げ出してしまふし、一向見込みがないと云ふことがわかつたので、通學は其まゝお流れとなつてしまつた。太一は別に不平も言はない。どうかすると茶の間に聞えるやうな駢をたてることはあるが、夜はそれでも自分の部屋に、生理學などをひねくつて居る。

「あれでも醫術試験を受ける積りで居るから可笑しい」と菊井は時々恚んなことを思ふ。

ふとも一人の聲の、もと居た書生の山田に似てることを思ひ出した。来る書生も来る下女も、一年と長く居たことのないことを思ひ出した。折から妻君がまた、何やら下女に小言を言てるのが聞える。菊井は未だ巻かない手紙の面を見て厭な顔をした。

「ではお爺や、明後日は間違ひなく来ておくれよ、いゝかい明後日だよしらん、明けに搦かれるやうにね、餅米は明日のお午前に極いとくと恰度いゝれ、れえ夏、あゝそれから爺や、また今年も七五三繩をねさう……六……七本ばかり持つて来ておくれ、松も？ あゝ忘れないでれ……あゝいよこ苦勞」

やがて爺が出て行く氣合がする。仙臺某醫院内、熊谷滿哉殿と書いて裏を反して菊井納、十二月廿九日と書いて筆を擱いた。手が冷たくなつて居た。

▲血書(伊賀上野町奥瀨霞翠) 此作者に望ましいのは、今少し實際を観察して貰ひ度い。前回の暗闘も左様であつたが、今度のも其弊に落ちて居る。かうした生活を書くには、もつと詳しく獄中の真相を知らなければならぬと思ふ。

▲二日酔(北海道野町渡江) 餘りに極端に書いてある。慘憺と言ふものは、こんなに簡單なものではあるまい。▲砂埃(伊豫松山市落二郎) 例の消極的な弱々しい處に長處はあるが、餘り卓れた作ではない。

▲空腹(長野市若麻織長風) 肉慾を肉慾として書いたもので、所謂春情文學だ。▲わかさ心(豊橋大山獨絃) 文章がいかにも疑つて書いてある。それに上手だ。けれど其描寫、其觀察、其着想總て幼稚である。それに、餘り冗漫に過ぎる。

▲涙(熊本縣八代町谷口無水) 何か書かうとして居る、頑固な老婆などにかういふ一時期があるかも知れない。けれど描寫が充分でない。餘程空想で書いたやうな處がある。▲正月の夜(静岡縣鈴木美代吉) 材料は好い。筆が伴はな